

八郎に対しての抗議だけでは腹の収まりかねた
初太郎宮司、その足で三野庄平のところへ赴いた。
袈裟まで憎い心境である。

「あなたとしたことが、理屈も通らず、どうして私どものところへこられたのか、私などにはとても理解できないところであります」

内心、困ったことをしでかしてくれたと考えた
三野庄平ではあったが、ここは一番、とことんまで空つとぼけて済ますほかないと覚悟のホゾを固めた。

「あのけがらわしい盆踊りなど即刻とりやめていただきたいと考えるものであります」
庄平は動じなかった。

「もう今夜から本踊りが始まるというときに及んで、私にどうして中止させる力がございませよう。たとえ私がやめさせようと力の限りを尽くしましても、村の人たちは自分たちだけで実行してしまうだけのことであります。むしろ私が加わって、そのような不祥事が起こらぬよう監視するのが最善の手だてではないではありませんようか。

「このような悪事を花ノ根に持ちこんできたのは、あなたもご存知のように、そもそもゼンガクレン八郎ではありませんか。あの若者の家へもいつてきましたのでありますか」

「もちろん、いちはやく、すでに行つてまいりました。八郎はどうにも手のほどこししようがないといったふうでありました」

初太郎は憤りのあまり、正直にいう。

「若者たちを扇動して音頭をとつてきた八郎に打つ手がないといっているのに、このぼけた老人に向かつて、あなたはいったい何をしろというのでありますか」

あなたはそうお考えにはならないのでありますか」

初太郎も、ここ三晩は見回りの手をゆるめるわけにはいくまいと考える。

盆踊りの最後の夜、庄平は初太郎に対して重大な裏切り行為を犯した。彼は囃子櫓の上から発表したものだ。この盆踊りを花ノ根の民俗芸能として保存するため、今後毎月十五夜の日に踊り大会を開くというのである。

産土神社宮司、東雲初太郎氏はこの思いもよら

ぬ背信行為に逆上して櫓の上に駆けあがり、元
村長、三野庄平氏に撲りかかった。と思うや、オ
タクウサンの着用した水色のハカマが、ひらりと
宙に浮いて地上に落ちた。不幸なことに、筋肉の
柔軟さをすっかり失っていた初太郎宮司は、勢
いあまって櫓の上から転がり落ち、右肩の骨を折
ってしまったものだ。全治四カ月。不本意ながら
オタクウサンは、ことし中は榊の枝を左手だけ
で振らなければならないようである。

盆踊りを保存するなど寝耳に水だった
しんだのでありますから、来年も再来年も続ける
ことに反対はしない考えのものです、
毎月一回みんなで踊るといのはいかがなもの
ありませんようか」

ここに、東雲初太郎宮司がいて
「民俗的な価値というのは、娘と青年が暗がり
に這い込むという前時代的な淫猥さでありまして、
そういう価値を保存するなどといった悪事には
私などはあくまで反対する所存であります」
と怒鳴れば、二人の箱入り娘を持つ中村ソノが

初瀬徳左右衛門は、長老会議開催を要求した。
いつまでもやられるというのでは費用がかさみ
ざる。村議に推してやろうといったときの約束と
ではだいぶ内容が違ってくるではないか。

シモノナガレの二本松の藤人が庄平の案に
正面切って反対した。
「この花ノ根の盆踊りのどこに保存すべき価値
があるのでしょうか」

藤人が庄平に詰めよれば、初瀬徳左右衛門はい
う。

「民俗的な価値はともかく、住人があれほど楽
初太郎の意見に賛成すると同時に、八郎の始めた
フォークダンスの会とやらも何やら気がかりでな
りませんなどと言出し、議論をいやがうえにも
紛糾させたに違いないのだが、初太郎はまだカワ
ラ木の接骨院の病室で痛みどめの薬を飲ませら
れていた。

徳左右衛門に反対するには庄平の意図を知ら
ねばならないと多山健吾村議会議員は思う。
「三野庄平さんには三野庄平さんの考えがなけ
ればならないのであります」
と多山健吾はいった。庄平が

「若者たちが雪隠こわしなどという悪質ないたずらをおぼえるフォークダンスの会よりは、もつと魅力のある楽しい何かを若者たちに与えてやりたい、私は心底から願ったのであります」

といえ、藤八はホコ先を転じた。

「その雪隠壊しの第一号被害者は庄平さんでありましたが、いかなる理由による第一号でありましたのか」

みんな一様にギクリとした。噂としてノゾキがばれたからだと聞いてはいるが、真実かどうか。

損っていたことが、いっそ恨めしい」

と憤慨したものもいた。百日の説法、屁一つ。

小原恵吉などはその最たる一人であった。

藤八はこれまで口こそ出さなかったが、庄平のやりかたのきたなさにあきれ果てたのである。

自分の父は金を貯めることにおいて汚なかつたかも知れない。しかし、それはあくまで他人には迷惑をかけない悪徳であったといえよう。吝嗇を悪徳とみること自体に疑義がありもする。

庄平が自分に橋をかけさせるときに川口を選

庄平に面と向かってこれを言つた者はいない。

庄平自身、やられた理由は残された紙片からこれだろうと想像しているだけで、表面からすれば、なぜだかわからないというのが本当だ。

ノゾキの行為そのものにたいしても、それぞれに受けとり方が違うのである。ある者は「へたなノゾキをしたものであります」と感じたし「庄平老人もなかなかオツなことをするものであります」と思った。

「このようなことをするなんて、この老人を見

んだことも、いまとなつてはノゾキ趣味を続けるために自宅から遠ざけたことがはつきりとわかる。川口にしたために五割がた費用は多くなったのである。それはいい。

しかし、愚かにもつかぬ盆踊りを復活させるためにまたしても自分の財力を当てにし、あまつさえ保存に反対する初太郎宮司をして大ケガをさせたのは何たることであるか。

橋をかける費用を負担しようとして出したときの藤八には、いささか口をすべらしすぎたといった

ところがあつた。しかし、この夜の藤八には、はつきり庄平と対決する気構えができていた。村の政界に野心はなく、庄平をやっつけても金になるわけではない。

これにはさすがの庄平も参った。御しかねた。

「橋については、わが村会議員たる多山健吾氏に對しても花ノ根住人の一人として言いたいことがあります」

と藤八は開きなおつた。

これまで健吾は大川のカミの橋を何回なおしたか、そのたびそのたびにまた同じような橋の造り

かたをしてきた。

「初瀬徳左右衛門どにお伺いいたします。

盆踊りのけいこ始めに酒食を出すくらいのがあるのでありましたならば、なぜ健吾議員と合弁して、たとえ一メートルでも大川カミの橋をコンクリートにつくりかえないのでありますか。私らにはその考えが、まるで皆目、さっぱり理解できないのであります」

花ノ根のためにこの長老会議が一体なにをしてきたのか、考えるにつれて、穴にもはいりたい恥かしさを感じてしまう。

藤八は涙をこぼしていた。声涙ともに下る大演説であつた。しかし、藤八が悲壮になればなるほど、長老たちは白々しい表情になつていった。この花ノ根に正義漢は自分ひとりしかいないといいたげな藤八の口ぶりが反感を買つてしまうのである。

花ノ根盆踊り保存会は滑り出しのキツカケを失つて、いつとはなしに沙汰やみになりはしたが、八郎のフォークダンスの会もいつ再開できるのか、メドは立たなかつた。

そのころ、マリアナ諸島に発生した台風十八号は楊子江流域を中心とする華中の大陸性高気圧に押され、予想進路をはるかに東方にそれて日本列島を襲つた。この台風のもたらした雨は、花ノ根にも百ミリを超える雨量となり、谷川を流れ下る濁流は多くの木材を大川へ押し落とした。

見まわりに出でいた二本松の藤八の目の前で、潜水橋は材木に突き当たられ、悲鳴もあげずにぶっこわれた。

藤八は歯をくいしばつてその情景をにらみつ

けていたが、後ろからボンと肩を叩かれて振りか
えると、八郎であつた。

「石なのでありますから、また拾い上げて造り
なおせば、同じことでもあります」

犬井八郎の顔は、表情あくまでも明るかつた
のである。

(以上9月24日放送分)